

第15回革新的研究開発推進会議 議事概要

- 日 時 平成27年10月1日（木） 9：30～10：00
- 場 所 中央合同庁舎8号館 5階共用A会議室
- 出席者 山口大臣、久間議員、原山議員
内山田議員、中西議員、橋本議員、平野議員
- 事務局 石原内閣府審議官、森本統括官、中西審議官、中川審議官、松本審議官
真先参事官、福嶋参事官
- P M 白坂PM、野地PM、原田（博）PM、原田（香）PM

○ 議事概要

午前9時30分 開会

○久間議員 おはようございます。ただいまから第15回革新的研究開発推進会議を開催させていただきます。

本日は公開で行います。

平副大臣、松本政務官、大西議員、小谷議員が御欠席です。

本日の議題は、「革新的研究開発推進プログラム（I m P A C T）のプログラム・マネージャー（PM）について」です。

本年、4月から行いましたPMの新規公募には76件の応募があり、I m P A C Tの推進会議及び有識者会議において、時間をかけ議論を行いながら慎重に審査を進めてまいりました。御案内のとおり、9月18日に開催されました総合科学技術・イノベーション会議におきまして、4名のPMを決定いただきました。本日はその4名のPMにお集まりいただいておりますので、研究開発構想の概略と、PMとしての抱負を語っていただきます。

本日の進め方ですが、大臣から御挨拶をいただいた後、PMからプレゼンテーションを、その後、有識者議員からコメントをいただくという形で進めさせていただきます。

なお、山口大臣は所用により途中で御退席されます。

それでは、最初に大臣から御挨拶をお願いします。

○山口大臣 おはようございます。ただいま御紹介をいただきましたように、実は後ほど日本学術会議がございまして、そちらへ行くものですから、先に失礼する御無礼をお許しいた

だければと思います。

9月18日の総合科学技術・イノベーション会議で、本日御参集の4名の皆さん方を新たなプログラム・マネージャー、PMとして決定をさせていただきました。厳しい審査を経てPMとして決定をされた皆様方には、まず心からお祝いを申し上げます。次第でございます。

4名の皆さんはいずれも、もうお見かけしていただいたらお分かりのとおり、大変お若い、いわゆる若手の皆さん方ばかりでございます。経歴も民間企業勤務とか、あるいは海外の経験等々、多彩なバックグラウンドをお持ちと聞いております。PMとして、活躍を大いに期待のできる逸材を選ぶことができたと思っております。

御承知のとおり、IMPACTというのは、失敗を恐れずに困難な研究開発に取り組んで、産業や社会を大きく変革するような非連続イノベーションの創出を目指すプログラムでございます。本日の会議ではPMの皆さん方それぞれから、挑戦の概要、あるいはPMとしての抱負とか意気込み等をお伺いさせていただいて、また、意見交換をしていただくということになっております。

私としても、テーマも大変興味があるテーマばかりでございますので、大いに期待をさせていただいております。どうか名前のとおり、まさに大きなインパクトのあるような研究を進めていただき、また成果を上げていただきますように、心から御期待をさせていただきます。御挨拶いたします。どうぞよろしく願いいたします。

○久間議員 どうもありがとうございました。

それでは、これからPMによるプレゼンテーションに入りたいと思います。

PMの皆様は順番に、これから実現しようとする構想の概略と、PMとしての抱負や意気込みについてお話しください。

時間が限られておりますので、お一人5分以内でお願いします。終了1分前と終了時間に鈴を鳴らします。

4人のPMにお話しいただいた後に、有識者議員からコメントをいただきたいと思っております。

お手元の資料1を御参照ください。

では、最初に白坂PMからお願いします。

○白坂PM おはようございます。慶應大学の白坂成功と申します。名前も縁起がいい名前です。覚えやすいので、この機会に覚えていただければと思います。

私は、東京大学の学生時代、三菱電機で働いているとき、また、途中ドイツのエアバス社

に交換エンジニアとして行っている間、そして、慶應義塾大学の方に移ってからと、この期間ずっと基本的には宇宙開発に軸を置いて研究開発を実施してまいりました。

今回のテーマは「オンデマンド即時観測を可能にする小型合成開口レーダ衛星システムによる安心の実現」というものとなっております。

我々の業界は、東北の震災のとき、大変残念といたしますか、悔しい思いをいたしました。これは宇宙技術がなかなか効果的に使われなかった、使うものにできていなかったという、思いがあります。それ以降、業界をあげて、多くの人たちが実際に役に立つ宇宙開発にするということで研究開発を進めておりました。

先日の鬼怒川氾濫のときには、実際に衛星の画像を使って氾濫域を観測するということが実現できたのですが、今回私が取り組むテーマというものが実現できた折には、この利用というのが一步だけではなくて二歩、三歩、先に進めるのではないかとというふうに考えております。

これまでの人工衛星というものはどういう使い方かといいますと、長い時間をかけて開発をし、先に宇宙に打ち上げておきます。何か災害が発生したときに、その災害が起きた場所を観測できるタイミングになったときに観測をします。実際、鬼怒川のとき、JAXAのALOS-2という人工衛星を使ったときには、氾濫後、観測をしてほしいという依頼を受けて、そのタイミングが来るまでかなりの時間がかかっております。これは、それでも、これまでの人工衛星の使い方からするとかなり短くなったものではあるのですが、私のこのテーマというのは、この考え方をちょっと根本から変えたいというふうに思っています。

と申しますのは、あそこを観測したいというリクエストが来てから、人工衛星を、そこを狙って打ち上げるのです。つまり、先に打ち上げておいて、たまたまタイミングが合ったときに観測をするのではなくて、見たいところ、観測したいところというものがあって、そこに向けて人工衛星を打ち上げていくという形のことを考えております。さらに、そのときに観測するのは通常のカメラ、光学のカメラを使いますと夜間はだめだとか、雲があったらだめ、雨が降っているときはだめとなるのですが、そうではなく、この合成開口レーダというのは天候に左右されず、明るさに左右されず観測ができます。

こういったこの合成開口レーダというものを使って、あそこを観測したいというリクエストが来たときにぱっと観測ができるといったことを狙っております。それも観測ができる

まで何日もかけてではなくて、数時間でその観測までいくということを狙っております。

ただ、これを実現しようとするすると、すごく大きな課題が2つございます。

一つは、そのオンデマンドでぱっと打ち上げるということを実現しようとするすると、ロケットもH-IIAのような大きなものと準備だけで何日もかかる。そうではなくて、小さなロケットで打ち上げなければいけないということで、人工衛星自体もすごくコンパクトにしなければいけない。ただ、この合成開口レーダの衛星システムというのは世界的に小型軽量化が不可能と実は言われており、大きな人工衛星しか今まで存在していないというのが現状でございます。これを、今までとは全く違うアプローチで実現することで、圧倒的な小型軽量化を狙っているというのが1つ目のポイントとなっております。

もう一つのポイントが、打ち上げてすぐに観測すると言いましたけれども、通常の人工衛星では、打ち上げた後に観測ができるようになるまでに大体数週間の時間を要しています。この間にいろいろな設定をしたりするのですが、これらを全部、高度な自動化、自律化をすることによりまして、打ち上げてからすぐ観測できるようにする。この圧倒的な小型軽量化というものと、高度な自動化・自律化ということを目指しています。これら2つのところを乗り越えていかないと、このテーマは実現できないというのが現状でございます。

これから3年半ぐらいの期間をいただきまして、この2つの課題というものを解決するために、メンバーを集めまして研究開発を進めていきたいと思っております。この3年半、いろいろなハードル、大きなもの、小さなもの、今想定しているもの、していないもの、たくさんあるとは思いますが、これを何とか乗り越えまして、全力でこの課題を解決し、テーマを実現するというところに向かって頑張りたいと思っておりますので、ぜひとも御指導、御鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

以上でございます。ありがとうございます。

○久間議員 ありがとうございます。

次に、野地PM、お願いします。

○野地PM 東京大学から参りました、野地博行と申します。よろしくお願いいたします。

まず最初に、こちらの革新的研究開発推進会議の皆様方に、私の提案を採択いただきまして、本当にどうもありがとうございます。感謝申し上げます。

私の提案は、実は2つの大きな研究領域がマージした、合流したところに位置しています。一つは日本がずっと得意としてきている微細加工技術、マイクロ、ナノ加工技術のグルー

プ、もう一つはバイオの計測技術です。こちらは特に去年、個人的にはノーベル化学賞を取り損ねたと思っております。いずれにしても、日本が強みとしている2つの領域がマージした分野で人工細胞デバイスといえるような新しい技術が今、生まれ出しています。

これは、非常に小さなバクテリアサイズのリアクタ、反応の器の中に機能的に分子を入れてまして、そこでさまざまな通常では発揮できないような機能を実現し利用する技術です。今回提案させていただいた内容というのは、まさにその微細加工技術でつくったリアクタの中に機能分子を効果的に入れ込んだシステムを用いて社会イノベーションというのを目指しております。

使い方としては主に3つ考えております。お手元の資料の図にありますように、〈はかる〉技術、〈つくる〉技術、そして〈ふやす〉技術、これは人工細胞をつくる、増える、細胞をつくるという、その3つのテーマに掲げております。

まず〈はかる〉ですけれども、小さなリアクタの中で計測することによって、非常に感度が上がります。皆様が健康診断で血液を取っているいろいろな疾病マーカーを計測していると思うんですけれども、そういった計測がこの小さなリアクタを用いることで通常と比べると100万倍、非常に高くなります。

これを実際に社会実装化したいと考えております。

この効果としましては、例えば公共機関、公共空間、例えば空港とか、もしくは飛行機の中でもそうですし、いろんなところで、例えばパンデミックを防止するためのセンサー、極めて高感度なセンサーの技術につながるというふうに考えております。また、これを例えば個人個人が持てるようにすれば、実は将来我々が早急実現しなくてはいけない予防医学、健康寿命を延ばす予防医学のためのセンシング技術、ハンディなセンシング技術につながるというふうに考えています。

2つ目の〈つくる〉技術ですけれども、これは小さなリアクタでさまざまな種類の機能性分子を少量多種合成します。ここでいう機能分子とは、例えばバイオマスの処理に使われるような酵素や、医薬品として使われるタンパク質やペプチドを想定しています。とにかく、ものすごく多種類の機能分子をつくらせて、その機能を定量的に評価し正確にベストな分子をピックアップしてくるという、そういう技術です。つくって、選ぶというわけがあります。

3番目の〈ふやす〉、これが極めてチャレンジングでして、デバイスの中で生体分子を再

構成、機能的に再構成させて、そこから生きてくる、増えてくるシステムをつくりたいというふうに考えております。これは、まさに自律的に増幅する人工細胞の作成を目指したものです。生物学の中では200年ぐらい続くパスツールのドグマ、すなわち生きているものは生きているものからしか生まれてこないというドグマが続いているわけですが、これにチャレンジするものといえます。工業的、社会的な意義としては、そこに人工的にデザインされた染色体を入れて、起動させて、天然の生物ではできないようなさまざまなバイオ工学というものを実現したいというふうに考えております。

このために私が考えているのは、この学際的なテーマ、当然新しい分野ですので若いタレントが必要です。こういう方々を集めてきて、そして、言い方は少し変かもしれませんが、楽しくやりたいと思っています。単にセレクションをかけるというよりは、どんどん若い方々のモチベーションを上げていただいて、楽しくやっていきたいと。ただ、個人的にはこれ、PMとしてはこの3.5年を単なるお祭りとして終わらせるわけにはいきません。実際に社会的なイノベーションとして実装化させることが必須です。ですので、当然ながら<はかる>、<つくる>、<ふやす>技術を使って、具体的な結果を出していきたいというふうに考えております。

もう一つ、実はもう少し長いタームで考えた場合には、このPMの業務の中で次の新しいジェネレーションのPM候補というのを育てていくということも強く意識して、プロジェクトを進めていきたいというふうに考えております。

以上になります。

○久間議員 ありがとうございます。

それでは、次に原田香奈子PM、お願いします。

○原田（香）PM 東京大学の原田と申します。おはようございます。このような機会を頂戴しまして感謝しております。ありがとうございます。

「バイオニックヒューマノイドが拓く新産業革命」ということで御提案させていただいたんですけども、バイオニックヒューマノイドは皆さんお聞きになったことがないと思うのですが、それは私が提案した言葉です。何かといいますと、人と同じような固さ、形の、眼球ですとか、そのようなものをつくり込んだ人の形の模型のシミュレーターになります。そのようなもののバイオニックヒューマノイドの中にいろいろなセンサーを埋め込んでおまして、例えばそれにどのような力を与えていたか、どのような温度がかかったか、そ

のようなものを定量的に判断することができます。それを今、人や動物が被験者となっているような、そのような状況に使っていただいて、より倫理的な、定量的な研究開発を行っていききたいと、それが一番の目指すところでございます。

まず、簡単に私の自己紹介をさせていただきたいと思います。資料に基づいているんですけども、2001年に東京大学の精密機械の修士を出まして、その後、日立製作所で3年間半導体の研究をしておりました。2005年から財団法人医療機器センターの流動研究員ということで小児病院に派遣されまして、そこで研究しながら、夜、早稲田大学に通って博士号を取得しました。2007年からイタリアでポスドクをしまして、そちらでいろいろな国際プロジェクトに携わらせていただきました。2010年からは東京大学で教鞭をとっているんですけども、専門はバイオエンジニアリングと機械工学になります。現在は公共政策大学院などと一緒に分野横断的なリーディング大学院などにも参加させていただいております。

今御紹介申し上げましたように、大学ですとか企業、病院、海外でいろいろ研究をしていますし、医療機器審査ですとか標準化の方にも携わらせていただいております。専門は医療ですけども、工作機械ですとかロボットの国際共同研究にも携わらせていただいております。いろいろなプロジェクトに携わらせていただきました。

こういうところの、いろいろ転々としたところの強みといいますと、あいつは分かっているというような形じゃなくて、その方にもそういう事情があると、その中に入って初めて、同じ釜の飯を食べて初めて分かるような、その相手の価値観、それをいろいろなプレーヤーの価値観を分かったような状態でプロジェクトをマネジメントしていきたい。それが私の目指すところですよ。

プロジェクトの概要も、こちら資料に沿って説明しますが、先ほど御説明しました人体を精巧にモデル化したバイオニックヒューマノイドをまず開発しまして、それによって定量的・倫理的な研究開発・評価方法を実現したいというふうに思っております。また、そのバイオニックヒューマノイドに対していろいろな操作を行うようなロボットをつくりまして、匠の技を学習しまして再現すると。医療だけではなく、広範な範囲に産業革命を起こしたいというふうに思っております。

非連続イノベーションのポイントについてですけども、バイオニックヒューマノイドにつきましても、ただ人の臓器と似ているというわけではなくて、しっかり測って、それと

似ているような材料を見つけて、できるだけ正確に再現すると。センサーを内蔵することによって、今まで、例えば人にどういう操作をしているかと、そういうことは測れていたんですけども、人がどういう操作をされているかというのは、例えば痛いとか不快とか、そういう定性的な評価でしかなかったわけですけども、これによって定量的に人が何をされているかということが分かるようになります。やることとやられることの両方を定量的にすることで、研究開発を加速したいというふうに思っております。

スマートアームにつきましては、匠の技を高度に再現するような、非常に高精度のロボットアームをつくりたいと思います。このイラストが、どのような分野で応用できるかという例を示したものでんですけども、例えば安全性評価でも、今までは例えば衝突試験でもモデルはあるんですけども、内臓の損傷ですとかそういうところまでは評価できていなかったと思いますので、そういう内部までつくり込んだ、センサーを張りめぐらせたもので正確に事故を起こしてみるとか、そのような形で、本当の事故が起こる前に計測したいと。バイオニックヒューマノイドの方は、スマートアームを使って模擬手術を行いまして、その患者さんで練習するような形ではなくて、お医者さんにしっかりと事前に練習してもらおうと、そのようなことを実現したいと思います。

世界トップの研究者を結集しまして、人や動物が被験者となるような製品開発を、定量的・倫理的なアプローチによって置き換えていきたいというふうに思っております。製造業や医療産業などの匠の技術が必要とされる分野の教育・訓練・評価・技術伝承を実現したいと思います。

意気込みとしまして、ぎりぎり30代の女性ということで、皆様は期待と不安がいろいろおありだと思うんですけども、そこは誠実に全力で頑張りたいと思いますので、御指導をよろしくお願ひしたいと思ひます。

よろしくお願ひします。

○久間議員 どうもありがとうございました。期待しかありませんので頑張ってください。

それでは、次に原田博司PM、お願ひします。

○原田（博）PM 京都大学大学院の原田でございます。もう一人の原田でございます。私、もともと20年以上にわたりまして無線通信関係の研究を行っておりました。特に最近ですと、少しここに持ってきているのですけれども、非常に小さい小型の無線機をつくっています。これはInternet of Things、センサー系に搭載できるような無線機ということで、

この無線機1つで500メートルぐらい飛ぶものになっております。

この無線機ですけれども、今までアメリカのIEEEの方で標準化を行ってまいりまして、国際標準として一応標準化するところまで達成しました。これ自身は今日本のスマートメーター用の通信規格として採用されています。これから約1億台のメーターにこの無線機がついてくることになるのですけれども、そこから得られるデータは、やはりたかだか1億というところです。これからのセンサー時代を考えると数千億、それ以上のセンサーをインターネットにつなぐ、特に無線を使つてうまくつなぐ必要があるというふうに考えています。

そのときに、やはりどうしても今の研究開発だけでは難しい部分がありますので、今回このImPACTというプログラムを使わせていただいて、まず超広域、非常に広域、数十キロにわたって根こそぎでデータを取ってくるようなネットワークを、まず構築したいと考えています。そのネットワークをベースにしまして、今度は数千億のデータが必要になってきますので、そのデータを高速で処理をする環境を整える必要があります。その処理系のエンジン、いわゆるデータベース系のエンジン、特に今までよりも数千倍、数千億ぐらいの信号処理がきっちりとできるようなものを、無線と連携、ネットワークと連携して構築したいと考えています。

今まで、データベース系とネットワーク系、特に無線通信系は別々に研究開発されていた部分があるのですけれども、このあたりをきっちり融合して一つの大きなデータ収集・解析プラットフォームをつくりたいと考えています。これを超ビッグデータプラットフォームと呼んでいます。この超ビッグデータプラットフォームを構築することによって、かなりスケラブルに数十キロから、数百メートルから、全て根こそぎ、数千億のデータを取ってきて、かつ、それを高速で信号処理できる環境が構築できるものと考えています。

ただ、こういうプラットフォームをつくっても、どうしてもガラパゴスと言われる可能性がやはり多くなると考えています。私の開発した無線システムでも、国際標準化されて初めて認められた部分があります。ということで、まず社会実装を前提に、かつ、国際標準化も見込めるというところも踏まえながら、幾つかのアプリケーションを少しその上に実装していこうと考えています。

ただ、その社会実装をする上で、単純に社会実装をするだけでは余り意味がないと考えまして、できれば社会リスク撤廃ができないかということで、今回は2つのリスクというの

を撤廃するために、この超ビッグデータプラットフォームを使いたいと考えています。

一つはヒューマンセキュリティというものです。これは医療系の健康社会リスクに関してのリスクを軽減するための方策です。もう一つはファクトリセキュリティです。これは今、工場において、工場内のセンサーを全て無線とネットワークでつないで、全て工場を遠隔で操作をしつつ、いろいろつながる工場、1つの工場だけではなく複数の工場をつなげていこうという話がいろいろ出てきています。そのあたりで、この超ビッグデータプラットフォームがうまく使えないと考えています。

特にこの、まずファクトリセキュリティの方ですけれども、単純にネットワークにつながだけではなく、サイバーテロ、故障、もしくは両方の検知をきっちり、この無線通信系とプラットフォームで行っていききたいというところがあります。そして、今、工場の中ですと数万から数十万のセンサーがありますので、そういったものが多数集まってくると、かなりビッグデータになってきますので、そのあたりをいち早く、全てデータを集めて、かつリアルタイムに監視をして、いわゆる故障、障害等をなくしていくシステムを構築したいと考えています。

ヒューマンセキュリティの方は、公的の既存データ、特に数千億のデータをうまく利活用して、かつ、連続的に計測できる普段の皆様のデータをうまく融合することによって、新しい予見医療型のシステムを構築したいと考えています。

以上、ビッグデータプラットフォームを構築して、国際標準、競争力を上げる形のシステムをまず技術的にはつくりたいと考えています。また、技術的にするだけではなく、このPMの期間中にできればこのデータを多く公開をして、国の政策等もしくは産業振興その他に利活用できればよいのではないかと、考えている部分があります。

なかなか大きなシステムでございますので、回す上では非常に大変だと思いますけれども、できるだけ今までの経験をもとに、うまくきっちりと成果を出していきたいと考えております。

以上でございます。

○久間議員 ありがとうございます。

それでは、有識者議員から、質問やコメントをいただきたいと思います。いかがでしょう。

内山田議員、お願いします。

○内山田議員 私、今日初めて皆さんとお会いしたんですけれども、今回4名の方、皆さん本

当に若い方がPMになってみえるということで、その若さを生かして、とにかく大きく挑戦していただきたいなと思います。

これは挑戦的プログラムというふうにつけていますけれども、計画書、事前に見せてもらったものでも、一つ一つの皆さんが取り組んでいる全体テーマはかなり成果が期待されるような感じがするんですけども、それを構成している幾つかのサブテーマでは失敗するものも、失敗するというか、思ったような成果が出ないということがあるかもしれませんが、これでも私はこのプロジェクトの場合はいいと。会社でも言っているんですが、先行研究というのはそこに答えがないということが分かるということも一つの大きな成果なので、それが早く分かるということが全体をうまく進める一つのポイントだと思いますので、頑張ってもらいたいと思います。

昨年からはじめて、我々もこのIMPACT、それからSIPも含めて、かなり手ごたえを感じだしていると思うのですが、これも今度は我々の問題なんですけれども、この継続性をどうやってやるかと。もう来年は追加募集をしても後ろが法律で締められているので、もう研究する時間もなくなってしまうので、この手法をどうやって継続させるかというのは、そろそろ考えた方がいいんじゃないかなというふうに思います。

○久間議員 ありがとうございます。

ほかにコメントありませんでしょうか。

中西議員、どうぞ。

○中西議員 今回、四名のテーマは、いずれもカバーする範囲が非常に広くて、結構大変だなというふうに思います。御説明の中にも幾つもございましたように、仲間づくりとそのカバレッジ、IMPACTの中でも特にそういう傾向が際立っているなと思いますので、是非、そのネットワークの拡大ということを、これは相当エネルギーを使いますけれども、しっかりやっただかかないと本当の成果に結びつかないのではないかなと。これは釈迦に説法かもしれませんが。そういう意味では、この会議なども是非御活用いただいて、ネットワークの拡大の中で大きな成果にしていきたいと、そういうふうに思います。

○久間議員 ありがとうございました。

平野議員、どうぞ。

○平野議員 お二人がすでに言われましたけれど、私も皆さん方の若さに期待しています。IMPACTは非連続性なる革新的な結果を目指しています。しかし、3年半ぐらいで達成

できるようなことは真の意味で非連続的な革新とは言えないと思います。政策的には3年半ぐらいである程度成果出していただかなければいけないのですが、皆さん若いので、必ずしも3年半にこだわることなく、本当に学術的にも、技術革新的にも、本当の意味での非連続的な結果を目指してやっていただきたい。かといって、3年半寝ているのではなくて、必死にやっていただきたい。3年半にとられるというと小さなことになってしまうので、存分に挑戦していただきたい。

○久間議員 ありがとうございます。

橋本先生、よろしいですか。

○橋本議員 是非頑張ってください。

○久間議員 皆さん、各議員から激励のお言葉をいただきましたので、思い切って大きな成果に向けてチャレンジしてください。どうもありがとうございました

それでは、I m P A C Tの実施スケジュールにつきまして、事務局から説明をお願いします。

○福嶋参事官 資料2を御覧ください。図の下側のPMの新規募集の部分でございますけれども、本日4名のPMの皆様から御説明いただいた研究開発構想を踏まえて、今後、研究開発プログラムの作り込みを二、三カ月かけて取り組んでいただくことにしております、できれば年内にはこの会議でプログラムの確認、御承認をいただき、速やかな研究開発の実施に取り組んでいただければと考えているところでございます。

また、あわせてJ S TとのPMとしての雇用契約などの手続きも進めていただくことになっております。

以上でございます。

○久間議員 ありがとうございました。

これからPMの皆様には、それぞれの構想の作り込みを行っていただきます。PMとして採択された後に、研究内容や出口戦略、組織を更にチャレンジングなものに具体化するのがI m P A C Tの大きな特徴です。PMの皆様にはI m P A C Tの精神を十分御理解いただいて、高い目標と、より深みのある内容を実現する計画をつくっていただきたいと思えます。

並行してJ S Tの支援を受けながら、皆様の足場固めにも取りかかってください。

我々有識者議員もPMの皆さんの相談に乗るなど、責任を持って運営に当たっていきたい

と思います。

以上をもちまして、本日の第15回革新的研究開発推進会議を終了させていただきます。

午前10時00分 閉会